

明治維新政府の中枢を見ると、薩摩・長州・土佐・肥前の四藩出身者が独占されていることがわかる。そのため、水戸藩は日本の大きな時代転換期に何も働きかけなかったと解釈しがちだ。もう少し当時を掘り下げてみよう。明治維新が果たされた背景には、水戸藩の先見の明があったのである。それでは、その先見の明とはどこから来たもので、幕末期の水戸藩士らは日本の未来に何を見据えていたのだろうか。

水戸藩の根本理念、また尊王攘夷派の志士たちの根本思想は水戸学にあると言ってよいだろう。『大日本史』に始まる水戸の学風は朱子学の影響を受けていることもあり、合理的であった。歴史を、ただの過ぎ去っていく流れと見なさず、現在・未来へとつなぐ要素の発見場とする。この考えは幕末期に尊王攘夷論へと発展した。つまり、敬うべき対象が神道の神々から天皇へと理解され、日本の未来のためには外国を排撃することが最善の策であると考えられるようになったのだ。誰が国家権力を握り、それをどのようにして用いるべきかはいつの時代にも問われる問題である。水戸学は、百年以上もの研究実績から見事に独自の答えを出し、さらには維新後の天皇制国家観念に重大な役割を果たしたのだ。

また、水戸学を学んだ者たちにも注目すべきだろう。幕末期には、水戸学を教わった水戸藩士らが自己の信念に動かされて、日本を変えた大事件を次々と起こしている。初めは桜田門外の変だ。18人中17人が水戸藩浪士であった。彼らは、天皇のご意向を伺わず、安政の大獄を実行した井伊直弼の首を討った。この件で徳川斉昭は蟄居を命じられたが、水戸の尊王攘夷運動はますます活発になっていった。そして起こる大争乱は天狗党の乱である。自らを正論、正義派と称した義勇な青年たちは筑波山に挙兵し、京都の一橋慶喜を頼って出発した。幕府に、さらなる攘夷政策を促すためであった。桂小五郎から軍資金を得たことも原因で変革の成功を確信していた彼らも、徐々に行程が苦しくなり、終には敦賀海岸のニシン倉に監禁された。天狗党員の最期は悲惨だった。一族殺害、斬罪、他は遠島や追放の罪に処せられた。結果、水戸藩は政権が保守派に渡ることを許し、尊攘運動の表舞台から姿を消すこととなる。

さて、彼ら水戸浪士も天狗党も、一体何を考え、何を目的として行動したのだろうか。御三家の一つでありながら争乱で退廃し、維新政府に水戸藩出身者の席はなかったのにもかかわらず、彼らは明らかに時代の先を読み、古い習慣に固執することを拒否したのである。それはひとえに、揺らぐ国家を生き抜き、何とかして崩壊から守ろうとするためであった。この朴訥とした精神から学ぶものはあるだろうか。私たちは彼らの姿から何を未来のために見出すことができるだろうか。それには、誠意をもって学びに励むこと、世界情勢に注意して目を向けることなどが挙げられるだろう。何より大切なことは、自分の信じるものを誰かに決めさせず、それを守り抜くことだ。あらゆる物事が目まぐるしく変化していく現代だからこそ、信念と共に立ち上がる必要がある。

水戸藩はその政策、教育で水戸学を発展させ続け、明治維新の魁としてあった。その途中で流した血、捧げた命は尊く、彼らの犠牲は日本が近代化する後押しをした。それと同時に、彼らは私たちに望みを託している。水戸に、日本に生きる者として、誇りを忘れないでほしいと。私たちには、今、移り変わる時代にあって、腰を据えて未来を見通す意味について考え直すときが来たのである。

〈参考文献〉

瀬谷義彦・豊崎卓「茨城県の歴史」山川出版社 昭和48年